

第二十九回

光照寺報恩講 法話

「悲喜の涙を抑えて」

本明 義樹先生 講述

(真宗大谷派聖教編纂室主任編纂研究員、
京都教区専光寺住職)

2019年 報恩講 本明義樹先生 「悲喜の涙を抑えて」

皆様ようこそお参りくださいました。只今ご紹介を頂きました専光寺住職の本明義樹と申します。京都府と申しましても奈良県との境界にございます精華町から参りました。平素は本山（東本願寺）の聖教編纂室というところで『真宗聖典』の編纂など、お経や親鸞聖人のみ教えを広くご門徒の皆様にお伝えしていくための調査研究をさせて頂いております。本日は光照寺様の住職継承奉告法要、そして報恩講という大切な法要に私のような若輩ものがお話させて頂くなど誠にもつたないことであります。しかし、私自身も先代の住職を亡くしまして来年二十五回忌を迎えます。先代住職である父との別れ、そして今日まで支えて下さった多くの方々との出遇いに思いを致し、本日こうしてご一緒にお勤めさせて頂けたことは本当にありがたいことだと感じております。光照寺様の先代のご住職はこの地に仏法の灯火を灯し、文字通り命を懸けてお護り下さいました。本日のご法縁は、その法の灯をしっかりと受け止め、心を一つにして踏み出しているただく尊い仏事であります。改めましてご門徒の皆様方、そしてご住職や寺族の皆様方には、心よりお慶び申し上げたいと思います。しかし先程のお話にもありましたように先代のご住職がお亡くなりになりましたまだ半年という期間でございます。このお慶びの仏事が、愛するものとの別れという深い悲しみの上にあることを憶念しつつ、本日の講題を「悲喜の涙を抑えて」とさせ

て頂きました。しばらくのお時間、皆様とご一緒に親鸞聖人のみ教えを通して報恩の仏事を頂きたいと思えます。

報恩講という仏事、そしてこの住職継承を奉告する法要ということも、その根本にあるのは今まで頂いたご恩に思いを致すことではないかと思っております。私たち一人一人が今日をお迎えするにあたり、まずは先代のご住職との尊いご縁が思い起こされるでしょうが、それ以外にもご両親のお念仏する姿、お爺さんやお婆さんとご一緒にお参りしたこと、さらにはお寺に誘ってくださった友など、仏縁を賜った今日までの自分の歩みに感謝の中で手を合わせられたのではないのでしょうか。

もう亡くなつて随分になるのですが小林秀雄という批評家に、現代社会を生きる私たちに自省を求める次のような言葉があります。「私たちの目が星を見ていると考えるか、星の光が私のところまで届いたと考えるか」という問いを立てられ、「何万光年という時を超えて私に届いたものと見る見方、感動を忘れていないか」ということをおっしゃっています。星の光が長い歴史を経てここに至り届いたように、私がこうして真宗の教えに出遇わせて頂きお念仏申すものになるには、親鸞聖人のご苦勞はもとより、有縁の人々の導き、さらには声なき無数の念仏者の深い願いというものがあるはずです。報恩講も、ともするとお参りをしてあげているとか、参らなければならぬからという思いでお参りすることがあるかもしれませんが、実はこの私の思いに先立

つ深い願いがあり、それによって押し出され、出遇うことができたのだという感動をもって迎えることが大切ではないかと思うのです。

ところが、最近は「恩」という言葉自体が日常生活の中で聞かれることが無くなってきているように思います。使われたとしても、「あの人は恩着せがましい」などと、良い意味では使われなくなってきました。そうした背景には世界全体を覆う合理的な考え方、損か得かというものさしで何でも物事を割り切って考える社会風潮があります。さらには、自己責任や自己実現などの言葉に象徴されますが、人には迷惑をかけないように、人から迷惑をかけられないようにすべきだという、社会からの無言の圧力もあるように思います。「恩」をかけたか、かけられたりするところが煩わしいような、ない方がよいのだという空気が社会全体を覆っている中で、横の繋がりがただではなくて、親やお爺さんやお婆さんといった縦の繋がりがすらも感じるものが希薄になっているように思います。少し前にインターネットのニュースを見て驚きました。インドで子供が親を訴えるという裁判なのですが、どういう訴えかといいますと「本人の同意なしになぜ自分を出産したのだ」というものでした。自分はこんな苦しみが多い、嫌なことをしなくてはならない世の中に生まれてきたくなかった。なぜ勝手にこんな世の中に産み落とされたのだと親を訴えるという、にわかには信じられないようなニュースでした。恩を感じるとか感じないとかの以前の問題として、こうして今ある自分の命を受け止められず、それを他人のせいにしてしまう現代の闇が

ここまで来ていることに驚きと共に、言いようのない寂しさを感じたことがありました。

そんな中、私にとって「恩」ということの意味を考えさせてくれるテレビ番組があります。ご覧になられている方もおられると思いますが、「ファミリーヒストリー」というNHKの番組です。これは有名な芸能人やスポーツ選手をゲストとして迎え、その方のルーツですね、お父さんお母さん、さらにはご先祖であるお爺さんやお婆さん、そういった方々を辿って、場合によっては戦国時代の武将であったご先祖まで遡ることもあります。そして調べ上げた家族の歴史を映画のようなドラマにして、観客に見立てたゲストの方に観てもらおうというものです。自分の親やご先祖が自分の知らないところで本当に多くの苦勞をされている。自分が一人で生きてこれたのではなく、子や孫の為にと本当に身を削って苦勞をされてきた歴史があり、そうした歴史の上に自分がいることに気づかされるのですね。そうするとほとんどの方が目に涙を浮かべ、自分が生きている命というものを受け止め直すといえますか、こうしたご苦勞に報いるためにも、もともと自分の命を大切にしないでほならないと、口を揃えて仰います。恩を知るといいう事を通して、はじめて私たちは今を生きるこの命を受け止め直すことができるのであり、力強い一歩を踏み出せるのだといつも感じさせられます。

しかし、最近その番組を見ておりました感じることがあるんです。どういう事かといいますと、自分のルーツを知ったゲストの方の感想としては、全く知らなかったとびっくりされることが多

いのですが、場合によっては身近にいるはずの祖父母、さらにはご両親の苦労話を聞いて、「そんなことがあったなんて…」とびっくりされるのです。そんなやりとりを見ていますと、自分の親や祖父母の事なのに、こんなにも知らないものかなあと思うことがよくあるのです。これまでどこかで聞く機会はなかったのかなあと感じるわけです。それで自分のことで少し考えてみます。両親はもちろん、祖父母のいろんな苦労話を幾らかは知っているのですが、それを誰から聞いたのかといいますと、本人から直接聞くことはほとんどないことに気づきました。法事で親戚の方が集まった時に、おじさんやおばさんから、お爺さんはこれこれの苦労をされたのだよとか、お父さんの若い時はこうだったよと、ほとんどが親戚の方や年配のご門徒さんなどから聞いていたことに気づきました。今の私たちの社会を考えると、お葬式は家族だけで、結婚式も海外で二人だけだという事も珍しくありません。すると、親戚や有縁の方と食事を共にし、じっくりと話し合い、自分のルーツを聞くことのできる機会はどんどん減っています。実はこうした社会の変化が、番組をみて疑問に思ったことの背景にあるのではないかと感じました。あらためて、現代社会を生きる私たち自身が人と人とのつながりを意識し、そこに恩を感じるということについて、積極的に考える必要があると思うのです。

今日住職継承という仏事にご縁を頂いて、私自身のことも思い出されていました。お寺は山奥の集落にありまして、小学校4年生までは分校に通うような田舎でありました。二百戸ほどの集

落ですが、ほとんどの方と顔見知りなのです。家族みたいなものです。ですから村の中を歩いてみると会う人、会う人に「どこにいくねん？」と聞かれるわけです。小さい頃はなんとも思わないのですが、中学や高校になりますとなんとなくそれが煩わしくなってくるのです。仕方なしに行き先を答えると、「何しにいくの？」と聞かれるわけです。どこで何をしようが私の勝手ですよ。いい加減にして！」と思うことも度々でした。そういう煩わしいのが嫌で、高校や大学の頃には都会でのひとり暮らしに随分憧れたものです。丁度私が大学を出て就職をしまして1年目の時、五十代半ばの父がくも膜下出血で倒れました。意識のないまま一週間の患いで亡くなりました。当時、大学を卒業し、就職もして何とか一人前になり、もう誰の世話にもならずやっつけいけるというような一つの思い上がりのようなものがあつたんですね。そんな中で父が突然亡くなり、お寺を引き継いでいかななくてはならないという、不安と焦りの中でお通夜を迎えることになりました。父は二月に亡くなっておりまして、お通夜の当日、京都でも何十年に一度という大雪が降った年でした。父は大阪府で教育委員会の仕事をしておりまして。現職中でありましたのでご門徒さんだけでなく、職場関係の方もたくさんお参りに来てくださり焼香の長い列ができていました。通夜のお勤めも終わり、お焼香の長い列も途切れましたので、私も本堂の中に入り、お参りに来てくれた友人と暖かいストーブの前で談笑しておりました。それから一時間ほど経ったころ、本堂の外から「すみません」という声が聞こえました。慌てて戸を開けると、雨具

をつけて頭から足の先まで雪と水に濡れた数名のご門徒さんがお焼香のためにお参り下さったのでした。雪の降りしきる中を、ご弔問に来てくださった方を見送るため、雪かきをしたり、誘導したりして最後まで立ち続けてくださったのです。私はそういった方がおられるという事も知らずに暖かい本堂の中でのんびりしていたわけです。雪でずぶ濡れになり、足下は泥で汚れてもおられ、外でお焼香をさせてくださいとおっしゃるので、お礼を述べお焼香をしていただきました。何気なくお顔を拝見すると、どなたも涙が頬をつたっていました。その私たちを家族のように感じ、支え、共に悲しんでくださるお姿を見た時に、あたりまえのように村の中で生活し、人々との関わりを煩わしく思っていた自分が、深い願いの中で、お育ていただいたのだと気づかされるということがありました。父が亡くなった時、緊張のためか涙が不思議と出なかったのですが、その方々の涙を見て込み上がってくるものがありました。そして、そのご門徒さんの涙、その光景が、私の住職としての原点といたしますか、歩みを支える大切な思い出の一つになっております。父が亡くなりまして、お会いする方々から涙ながらの励ましをいただきました。振り返ってみますと、そうした涙というものに随分励まされて、前に進むことができたように思います。皆様にとりましても様々な別れの中にあつて、涙を通して、人とのつながり、さらには命の根の深さを再認識するといったご経験があるのではないかと思えます。そのように涙という事を自分の中で考えめぐらしておりました時に、フランスの思想家でジャック・デリダという方の

こういう言葉に出会いました。

涙こそが目の本質であり、視覚ではない。(ジャック・デリダ『盲者の記憶』)

こういうことをおっしゃっている言葉に出会いまして、非常に大切な指摘だと感じました。書かれてある本は難解で、私も一読しただけで十分なことは理解できていないのですが、ここで言われている視覚とは、可視化できるものの表面的なことを理解し、分別してそれを知識として蓄えようとする作用(はたらき)の象徴とも言えるのでしょうか。一方、涙とはその視覚のより深いところに、知識では把握できない、共に歩むものとの繋がりや優しさや悲しみのような、本当に大事なものに触れた時に溢れ出るものを象徴しているのだと思うのです。つまり、自分の視覚で捉えたものとそれが打ち破られた時に溢れ出る涙というものを対照的に取り上げ、私たちにとつてこの涙こそが本当に大事なものであるというようなご指摘をしてくださっているのです。涙が流れる時、その涙によって視界が奪われます。これまで当たり前のように見えていたものが滲んで見えなくなるといふ事は、つねに外に目を向けているその視線が内側に向けられ、これまで当たり前にしてきた、自分の歩みの背景にある支えや願いとの出会いの感動というものを涙という表現を通して言い当てることもできるのではないだろうか、これまでの私自身の歩みと重な

り、デリダのこの言葉にとっても共感いたしました。

では涙はどのようにして出てくるものなのでしょうか。少し調べてみたのですが、実は感動することによって出る涙については、科学的には十分解明されていないようです。ただ、脳の「正中前頭前野」という高度な精神活動をつかさどる部分の中でも、特に共感に関係する場所の活動が非常に活発化するときに涙が流れることが分かっています。だとすると、すべてがそうではないでしょうが、涙というのは人との出会いや別れ、人から頂いた優しさ、自分にかけてくれた願いといった他者との深い共感や共鳴によって流れるものだと言われているわけです。一方、視覚という事を考えますと共感ではなく、所有という性格が強いように感じます。先日、幼稚園に通う息子の音楽発表会に行ってきました。街にある、小さなホールを借りて下さって合唱や演奏がありました。あいにく法務があり遅れてしまい、一番後ろの席しか空いていませんでした。席に着くと、丁度ステージの幕が上がるところで、一斉に観客席の照明が消えて暗くなりました。すると、蛍の光のように、無数の青白い光が観客席全体に浮かび上がったんです。何かと思つてよく見ますとスマートホンやビデオのバックライトでした。皆さんがお子さんの姿を撮影されるので、そのモニターの光が観客席の至るところに点々と光っていたんですね。たった一度の大切な思い出ですから、しっかりと演奏されているお子さんの姿を目に焼き付けるべきなのに、ファインダー越しや画面越しに眺めている。それを見て、私自身も大切な一コマを撮影し、保存

すること、見たことにしてしまっていたことに気付かされました。皆様も旅行などに行かれたら気軽にデジカメやスマホで写真を撮られると思います。私たちはともすれば撮影したことで、見たことになってしまうところがあります。旅行写真を後でご覧になられ、「あれ、こんな所に行ったかしら？」と思うような写真があったりしないでしょうか。どうもこの視覚というものは私たちの所有意識と直結しているんですね。そして、この視覚によって所有されたものを、知り得たもの、つまり知識として認識するということがあろうかと思えます。

視覚 Ⅱ 所有 Ⅱ 知識

視覚が所有や知識と関わる一方で、涙は、共有や共感ということと深く関わるものです。ところが、私たちの現代社会において、この所有や知識というものが非常に幅をきかせています。この視覚を通して得た知識は、物事の表面的なことだけしか見えていないにも関わらず、自分の価値観や物事をはかる物差しとなり、他者を裁いたり、自分自身を縛ることもなります。実は仏教の教えとは、この所有や知識に偏ってしまうわれわれのあり方を根底から問い直すというところに重要な役割があるといつてよいと思います。

皆様もよくご存じだと思いますが、『観無量寿経』という経典がございます。この経典は、頻

婆娑羅という国王が、我が子である阿闍世のクーデターによって殺されてしまい、お妃である韋提希までもが牢に閉じ込められてしまう「王舎城の悲劇」が背景となっています。このような悲劇の渦中であって、韋提希はお釈迦様に「どうしてこのような悪い子が授かったのですか」、「もうこんな世の中には生きていけません。憂いや苦しみが無いところを教えてください」と懇願されるのです。そうした苦しみ悲しみのどん底にある韋提希に対し、お釈迦様は、「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ず、遠く観ることあたわず」と諭されます。

汝は凡夫

心想羸劣

未得天眼

不能遠觀

仏、韋提希に告げたまわく、「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ず、遠く観ることあたわず。諸仏如来は異の方便ましまして、汝をして見ることを得しめたまう。」

〔『仏説観無量寿経』『真宗聖典』九五頁〕

どういう事かといいますと、まず「汝是凡夫」つまり、あなたは凡夫ですと言い切られます。そして「心想事成」とは、羸も劣も弱い、衰えているという意味で、つまり意志薄弱であるということですが。こつちからいわれたらそうかなあ、あつちからいわれればそうかなあと、自分の意志を強く持てずに、自分がこうだと思つたことを貫くことが出来ない弱いものをいいます。現代の私たちに置き換えてみても、社会の見方、考え方に左右されますし、周りの状況や空気を推し量り、心の底から私自身がこうだと思つたことでもなかなか全うできないあり方といえるのではないのでしょうか。そして「未得天眼」、つまり未だに天眼を得ていないと、だから「不能遠觀」、遠く観ることができないのだとあります。天眼を得ずの意味については、色々と解釈されているのですけれども、かつて宮城顛先生は「天眼」について「天人の眼」のこととして、その意味するところをお話くださいました。天人の眼にどういう特徴があるかというところ、瞬きをしないそうです。天人は一度も瞬きをせずに眼を開いて見続けることができるそうです。眼が乾燥しないかと心配になりますけれども、そういった心配がないのが天眼だということです。これは何をいわんとするかといいますと天人はずっと眼を開いているので、一瞬も見逃すことなく、すべてが見えていることを表します。逆に、瞬きをしているということは、一瞬であつてもまぶたを閉じているのですから、見えていない一瞬があると言えます。つまり天眼を得ずという事は、私たちは見ているように見えていないことがあるという事実をお示しくださっているのだと教えていただき

ました。そう考えますと、私たちの日常でもよくあることなんですね。長男が通う地元の小学校では、冬になるとマラソン大会がございます。休日に開催されることもあり、たくさんの親御さんたちが沿道で応援されるのです。去年、連れ合いがPTAの役員をしております、コース上で誘導などのお手伝いをさせていただきました。当然応援されるお父さんやお母さんの様子が見えるわけです。子供たちはみんな歯を食いしばって一所懸命走っています。ところが、どの親御さんも自分の子供が走ってくるのを心待ちにされているわけです。すると、自分たちの目の前を別のお子さんが頑張って走っているのを心待ちにされているわけですね。すると、自分たちの目の前を走ってくるのが見えるやいなや「おーい！○○ちゃんガンバレー！」と大声援を送り、通り過ぎてしまうと、また知らん顔されているのだそうです。その姿をみて「その子の後にも続けて一所懸命走っている子たちがたくさんいるのに、どうして声援を送ってあげないのかと、何か寂しくなったわ」と連れ合いが申しました。それを聞いていて思いました。結局見えているようで見えていない、自分の子供しか目に入ってこないのだと。このように私たちは、見ているつもりで見えていないということを、日常生活の中で無意識でやっているんですね。

亡くなられて丁度十年になるのですけれども、森繁久弥さんという有名な俳優がおられました。亡くなられました当時、追悼番組や業績をたたえる文章などが随分たくさん紹介されました。あ

る新聞に森繁さんにまつわる逸話が紹介されてありました。

芝居が始まったというのに、その少女は客席の最前列で頭を垂れ、居眠りをしている。森繁久弥さんをはじめ俳優たちは面白くない。起こせ起こせ……。そばで演技するとき、一同は床を高く踏み鳴らしたが、ついに目を覚まさなかった。アンコールの幕が上がり、少女は初めて顔を上げた。両目が閉じられていた。居眠りと見えたのは、盲目の人が全神経を耳に集め、芝居を心眼に映そうとする姿であったと知る。心ない仕打ちを恥じ、森繁さんは舞台の上で泣いたという。

こんな文章が載っておりました。森繁さんは最前列の観客が頭を垂れているので、居眠りをしていると思い、失礼なやつだと、前でドンドン、ドンドンと足を踏みならしたわけです。ところが実はその方は盲目、つまり目の不自由な方で、一所懸命、耳からの音をたよりに舞台の様子を心の眼に映そうとされていたのです。それを後で知って本当に申し訳ないことをしたと涙を流されたんですね。私たちはいつも見えているつもりなのです。分かってはいるつもりなのです。ですから悪意のないままに、見えていると思っているがゆえに人を傷つけ、また自分も傷つくという事が往往にしてあるのでしょうか。お釈迦様が「未だ天眼を得ず」とおっしゃられますのは、あなたは見えているつもりなのかもしれないけれども実は見えていないことが沢山あるのだよという事です。そして目先のこと、自分の興味のある事は注意してみることがあっても、その先にある大

事なものを見ようとしな、見えていないのだという事をお教えくださっているのが「遠く観ることあたわず」というお言葉です。ですから私たちは自分が見るといふ立場、そして自分が見えているという思いを絶対のものとし、それに縛られると、結局自他を傷つけることになってしまふのです。それを超えるためには、先ほど申しましたように目が星を見ているというあり方から、星の光が私に届いているという視座の転換、つまり自分が見るといふ方向だけでなく、向けられている眼差しを感じる事が非常に大切になってくるのではないかと思っております。

もう今から七、八年前になります。先代の住職である父の十七回忌の法要がありました。長男がまだ幼稚園に入るか入らないかの頃だったと思います。「今日はおじいちゃんの法要だよ」といふと、「法要って何?」と聞くわけです。どうも法要の意味が分かっていなくて、今まで会ったことのないおじいちゃんと今日会うことができると思っていたようなんです。「何時になったら来てくれるの?」と聞いてくるので、「おじいちゃんが会いに来るのではないよ、亡くなったおじいちゃんの事を皆で偲ぶ日なんやで」と言つて、何とか納得させたんです。そうしたら今度は「おじいちゃんはどうな人?」と聞いてくるんです。そういえばおじいちゃんの写真もあまり見せていなかったと気づきまして、写真を見せて色んな思い出なんかも話してあげようと思つて古いアルバムを引っ張り出して写真を探しました。大きく写つている父の写真を探しますが、なかなか見当たらない。家族写真はたくさんあるのですが、父が写つてない。なぜ無いのかなあと

考えてみたら、写真を撮っているのが父だからでした。カメラ好きということもあり、いつも撮り役にまわっていたので、父の姿が写っている写真がほとんどなかったんですね。それでも懐かしい写真を眺めながら探していると、一枚の写真に目が止まったのです。私と姉と母が、私の6歳のときの誕生日にケーキを前にして写してもらった写真なんです。こんな笑顔がよく撮れたなあと思うほど、みんなニコニコとうれしそうな笑顔で写っている写真だったのです。余程嬉しかったんだろうなあと思つた時に、この写真を撮影したのが父だということ、そしてこの笑顔は父に向けられていたのだということに気づきました。そしてレンズ越しにこの笑顔を見て、おそらく同じようにうれしそうな笑顔でいてくれたのが父だったと気づいたのです。つまりこの写真に父の姿はないけれども、確かにこのとき一緒にいて、私たちにまなざしをむけてくれていたのだと。父の姿を見つけようと探し求めていたけれど、この一枚の写真から、私たちにまなざしを向け、そして願いをかけてくれた姿なき父と出会うことができたと感じました。フラインダー越しに、健やかに元気に育ってくれよという父の願いがかけられている写真であったと気づいたとき、つまり、その一枚から私に向けられている眼差しを感じることができたとき、姿かたちとしての父が写っている写真と出会う以上に、深く父と出会えた気がいたしました。その時、心の奥底から熱いものが湧き上がってきたことが忘れられません。そうしますと、私たちは自分を起点にして、外に向けて見よう見ようとしていくわけですが、しかし、その自分がす

に深い願いによって願われ、眼差しを向けられていたのだと、視点が転換するところに生まれる深い感動こそを象徴的に涙と表現することができるとは思えないでしょうか。

しかし、私たちが自分の眼差しが外に向けられていることや、知識を蓄えること自体を批判的に考えたり、問い直すなどということはなかなか容易なことではありません。だからこそお釈迦様は続けて「諸仏如来は異の方便ましまして、汝をして見ることを得しめたまう。」とお説きくださいます。あなたが本当に出遇わなければならないものを諸仏が私たちに見せて下さるのだと。諸仏が異の方便、つまり特別な手だてによって私たちに大事なものを教えてくださるのだと。続けてお説きになります。本当に大切なことは、私たちが自分の意志で見よう、知ろうとしても、それを知り尽くすことなどできないということを教えてくださっているのでしょうか。このことは、私たち真宗門徒が聞法を通して、無数の眼差しや願いに支えられ、今このいのちを生きつつも、自分を起点にしか物事を見ることのできないこの身の事実に立ち返らせて頂くことと、決して別ではないと思っております。ここで少し休憩を頂きたいと思えます。

〈休憩〉

それではもうしばらくのお時間ですが宜しくお願いいたします。

お寺の掲示板に「お前も死ぬ」というハツとするようなお言葉を掲げていただいております。それは同時にお前の大切な人もいつかは死ぬということでもあります。日常生活において、今あるいのちが当たり前になってしまい、必ず訪れる自分の死、愛する人の死という事実から私たちは目を背けております。今もふと思いついておりましたが、父親が倒れましたその日の朝、家から一緒に勤めに出かけました。玄関を出て、車に乗るまでの少しの間、二人で一緒に並んで歩いておりました。少し父の後ろを歩いていたので、最後となった父の後ろ姿というのを今も鮮明に覚えているんです。しかし、これが最後の別れになるなど思っています。いまでも、結局一言も話さずに、それぞれの車に乗り込みました。こんなことになるなら最後にたとえ一言でも声をかけておけばよかったと後悔しました。いつもご苦労様とか、感謝の気持ちや、いつも迷惑かけてすまないとか。でも何も伝えられないまま終わってしまった。また明日がある、来月がある、来年があると思っているんですね。でも、本当は今しかないんです。改めてそういう気づきを頂けたのも、本日こうしてお参りさせていただき、「お前も死ぬ」という言葉を、先代のご住職がご自身のいのちをかけて、私たち一人一人に投げかけて下さっているからだと思うのです。

親鸞聖人の「悲喜の涙を抑えて」という講題を掲げさせて頂きました。これは親鸞聖人の主著であります『教行信証』のお言葉でございます。皆様がお勤めになられます『正信偈』も『教行信証』の「行巻」に説かれているのですが、その『教行信証』の一番最後に「後序」と言われて

いる跋文、つまり結びのお言葉にございます。そこに宗祖が『教行信証』を撰述された由来が書き記されているところがございます。

由来の縁

親鸞聖人はご自身の事についてはほとんど語られることがないのですが、法然上人と出遇い、そして念仏弾圧によって生き別れになられるのですが、その後も生涯にわたって賜った教えを聞きし続け、真宗の教えを切り開られた宗祖自身の求道が振り返られ、「悲喜の涙を抑えて由来の縁を註す」と結ばれてございます。

悲喜の涙を抑えて由来の縁を註す。

（『教行信証』「化身土卷」『真宗聖典』四〇〇頁）

ですから、親鸞聖人の教え、『教行信証』のお言葉というのは、知識や思いつきで書かれたようなものではないのです。この「悲喜の涙」こそが親鸞聖人のお言葉、教えを貫いているのです。知識や思いでもって、こっちにいいことが言われてある、あそこにもいいことが書いてあるぞと、

それらを単にまとめて本にしたのではなくて、自分が出遇い得た教えというものを深く訊ね、その教えの奥底に自分にかけられた願いに触れることで、この身に賜ったご恩に対する感動が貫いているのですね。だから、悲喜の涙を抑えて由来の縁が述べられた後に、「師教の恩厚を仰ぐ」と語られます。師教とは師の教え、お導きですね。よき人法然上人をはじめ、三国七高僧の教え導きの厚きご恩を仰ぎ、さらには「仏恩の深きことを念」ずと、こういう言葉が続くのです。

師教の恩厚を仰ぐ

仏恩の深きことを念じて

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これに因って、真宗の詮を鈔し、浄土の要を撫う。ただ仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲を恥じず。もしこの書を見聞せん者、信順を因として疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。

（『教行信証』「化身土巻」『真宗聖典』四〇〇頁）

つまり悲喜の涙を抑えるという、その身をつらぬくものが、師から頂いたご恩、さらには仏様

から頂く恩の深さというものであり、そのことを憶念しつつ、聞き開いて下さったのが親鸞聖人の教えであります。

ここで、悲喜の涙の意味を明らかにするためにも、後序に語られる「由来の縁」について、少し確かめておきたいと思えます。まず一番最初に専修念仏の弾圧について記されております。法然上人、そしてその教えを聞く吉水教団の同行が、国家権力によって処罰されます。安楽や住蓮ら4名が死罪となり、宗祖は越後、法然上人は土佐へ流罪に処せられ、生き別れになるという承元の法難のことが述べられています。そして二つ目には、法然上人の入滅について説かれます。そして、三つ目には、それらの出来事を踏まえて、法然上人との出遇いの意味について記されています。法然上人との出遇いにより、雑行を棄てて本願に帰すことができた自らの回心についてであります。そして四つ目には、法然上人から『選択集』という念仏の教えが説かれた大切な書物を、ごく限られた方にしか許されない書写を自分にも許されたという感動が述べられております。

私はこれまで「悲喜の涙を抑えて」といわれるときの「悲喜」について、「悲」と「喜」を分けて考えていたんです。つまり、弾圧に遭ったことや、法然上人の入滅は悲しいことなので「悲」、法然上人に出遇ったことや『選択集』の書写を許されたことは喜びなので「喜」だと思っていたのです。そうして悲喜の涙を、悲しみの涙と喜びの涙というように分けて考えおりました。しか

し、この度いろいろ考えてみて本当にそうなのかなあと。私たちの人生において、これは良い出会いであった、あの出会いで随分得したとか、あの悪い出会いさえなければと思うことは確かにあるでしょう。しかし、それらは自分の都合や損得勘定に立った考え方と言わねばなりません。果たして、宗祖がそういうように考えて「悲喜の涙」と語られているのだろうか。

親鸞聖人がご自身の人生を貫くご恩という一事に立たれた時に、「悲」も「喜」も切り離すことの出来ない一つの事柄として押さえられているのではないかと思うのです。たとえば学生が大学を受験して合格すると嬉しいわけで、これは喜びといえます。しかし、合格に至るまでには、辛い受験勉強、遊びを我慢するなどの犠牲や、成績が思うように上がらない悲しみというものがあつたでしょう。その辛さや悲しみが深ければ深いほど、心の底から喜ぶことができ、大きな喜びとなるわけです。つまり本当の喜びというものは、深い悲しみや苦しみをその奥深くに包んでいるのではないかと思うのです。一方で悲しみはどうか。大切な人との別れ、愛する人との別れである愛別離苦ということは非常に悲しいことでもあります。その悲しみが本当に深く悲しいのは、その人との出会いが本当の喜びとなっていないからではないでしょうか。つまり、出会いを喜べない人との別れがあつても、そこには本当の悲しみはないといえます。悲しみが本物と言えるのは、出会いの喜びを内包しているからなのでしょう。すると、悲しみと喜びは、それが本当の悲喜といえるものであるなら、私たちの思いで分けることのできるようなものではないという事です。

そのことに私たちは気づくことがない中で、あれは良かったけど、これは良くないと、自分の思いで色分けしてしまっている。果たして私たちは、自身の歩んできた人生や出来事を振り返ってみた時に、それらを悲喜の涙という感動をもって受け止めることができているでしょうか。親鸞聖人は法然上人との出遇い、そして別れという人生の一大事を悲喜の涙という感動をもって頂き直されたのだと思います。念仏に対する度重なる弾圧や批判は、「怒り」や「怨み」として受けとめられ、『教行信証』がそれらに対する反駁の書として書かれていても不思議ではないでしょう。しかし、宗祖にとっては本願に帰し、そしてその教えを付属された喜びが、本物であるが故に、批判や弾圧、師との別離ということの中にも、自己自身と同じく人間存在そのものの悲しみを如来に大悲されているものとして、「悲喜の涙」をもって撰述されたといえるのでしょうか。教え導いて下さる「師教の恩厚」、さらには私たちのいのちの輝きを願い、呼びかけてくださる「仏恩」の深さに頷く、つまり、本願に帰すことで、人生全体を悲喜の涙という感動をもって頂きなおすことができるのだと思うのです。あらためて自分の人生を自分の思いで、損か得か、善か悪かなどと価値付けし、そのことに縛られている事実には、一度立ち止まり、人生の一つ一つをもう一度受け止め直すことを教えて下さるのが『教行信証』という書物であることを皆様方と確認をしたいと思っております。

ところが、私たちの現代社会と言いますのは、先ほどから繰り返しておりますけれど、恩を感

じるということがなくなり、人生を感動をもって受け止めるという事が無くなってきているように感じています。そうした社会に目を向けると、社会全体を覆っている考え方、これはもう無意識的に働く感覚といえるのですが、「等価交換」という考え方に支配されていることに気づきます。要は、お金を払ったら全てが清算されるという考え方は、これと対照的なものは何かという「贈与」という考え方は、贈り物やプレゼントです。

等価交換

贈与

等価交換は、消費経済、貨幣経済が中心となっている現代社会で大変幅をきかせています。その特徴は、何かを買い、その対価であるお金を払うと、これで双方の関係が完結し終了してしまうことにあります。ところが、贈与はその関係が終わらないところに特徴があります。ある人にプレゼントをするとします。相手は感謝し、後日会った際に、「先日はありがとうございました。これは旅行に行った際のお土産です」となったりしますよね。今日お伺いする時、東京駅の売店で飴を買いました。当然お金を払いました。もし帰りにわざわざ東京駅のお店に立ち寄って今朝はありがとうございましたなどと、変な人と思われてしまいます。もうお金を払った時点

で、双方の関係が切れているのです。贈与はそうはいかないですね。当たり前すぎて、こんなことを考えることはないでしょうが、実はとても大事なことだと思うのです。

勤めております編集室で私は主任をしております。女性の職員が二人おられるのですが、今年の二月に、「ちよつと主任お話しいいですか」と。そして、「今年のバレンタインの件ですが」と。バレンタインの件って、何だろうと思いましたが、「お返しも大変だと思いますので、話し合った結果、バレンタインは無しにします」と言われました。喜んでいいのか、悲しむべきか、よく分からない複雑な気持ちになりました。特別チョコレートが好物でもないですし、色々と考えてくれたんだと思うと、それはそれで良かったのですが、やはり、バレンタインのチョコをもらうのは嬉しいわけです。で、バレンタインのチョコの何が嬉しいのか考えてみました。たとえば近くのコンビニで買ったチョコに値札も張られたままで、レシートまで入ったものをビニール袋のまま「これバレンタインです」と言われても嬉しくありません。逆に何これ？となります。やはり、ギフト包装されてリボンでもしてあり、手紙に一言添えてでもあったら嬉しいわけです。どこが違うのかといいますと、贈与というのは、単なる品物のやりとりではなく、そこに気持ちが入っていることが重要なのです。日頃の感謝の気持ちであったり、本命のチョコなら好きですという事もあります。何か気持ちがかもっているのが贈与なのです。ですから、贈与というものは、受け取る側にとっても商品だけでなく、そこにこめられている気持ちも一緒に受け止める

ことで、初めて成立するものだといえます。二月は私の誕生日でもあるのですが、息子と連れ合いがセーターをくれました。何でセーターなのかと思いましたが、自分がいつも着ているセーターの肘のところが擦り切れて破れていたんです。私自身は気付いていなかったのですが。そういうところも見てくれていて買ってくれたのかと思うとセーターがどんな素材で、自分の好みに合うかどうかという事よりも、こめられている気持ちが嬉しいわけです。

その気持ちを受け止めることができる、感謝の気持ちでお返しをしようという事になりますから贈与の関係は終わりません。セーターを貰っておいて、幾らでしたかと言って5千円返していたら何をしているのか分からないわけです。気持ちでもらったものを気持ちで返すという関係がずっと続いていくわけです。ところが今の私たちの社会は等価交換の関係が中心ですね。つまり何かを貰ったり、してもらうことで、借りをつくるような関係を煩わしく思い、そうした関係をすぐ清算したくなる。だれにも迷惑をかけたくないし、かけられたくない。貸し借りなしという状態をよしとします。最初にも言いましたけれど、自己実現とか自己責任というところでは誰かが願っているにもかかわらず、支え合いや繋がりはどんどん稀薄になってしまふ。

等価交換 …… 関係を切る

贈与 …… 共感

私の住んでいる田舎では、村の外れに専用の火葬場があります。ですから出棺は、葬列を組みましてリヤカーのような柩車でご遺体を村のはずれに運びます。そして、隣組と言つて、ご近所の数名の人たちによつて茶毘に付すのです。そのような風習がまだ残っているほど、人の繋がりを大事にする地域なのです。誰かが亡くなると村の人は例外なく全員が野菜料というものをお悔やみとして遺族のお宅に持つて行くのです。今は千円程度の現金ですが、昔は実際に野菜やお米を持つて行つたそうで、急なことで準備も十分できていない中での不幸だからこそ、お互い支え合おうという互助的な仕組みが今も残っているのです。ところが、等価交換の考え方が村の中にも浸透してきた影響で、最近の若い世代の方は「野菜料なんて必要ですか？」となつてきているようなのです。村の繋がりも稀薄になつてきていますから、ほとんど付き合ひのない、よく知らない家もあるわけです。すると、贈る方も、貰う方も煩わしく思えてくるのです。ところが、年配の方は「何ということを言うんだ、これこそが大切なんだ」と、その風習を残そうと頑張られます。お互いが繋がり助け合うその気持ちが一番大事なんだと若い方と真つ向から対立することに。助け合いや絆が大切だということは、頭では理解できても、日常の生活のなかでこうした贈与

的な関係の大切さを守り抜くことは容易ではありません。つながりとして大切にされてきたものが、つながられていくという負担になってしまふ。等価交換が前提となった社会の中で、対価さえ払えばそのつながりから自由になり、誰にもたよらず、誰にも借りをつくらなくても生きてけるような錯覚に陥ってしまうのです。そのような私たちの在り方に、あらためて知恩という気持ちを与えるものがお念仏の教えであります。

お念仏と申しますと、皆さんは何でもなくように合掌して南無阿弥陀仏と称えておられますけれども、これまでお念仏に出遇ったことのない人に、いきなりお念仏をしてくださいといひましても簡単にはお念仏することはできません。こうして今、自然にお念仏が出るまでには、家族のみんながお念仏をする姿や住職の勧め、お参りに誘ってくださる友の導きなどに育まれることで初めて口からお念仏が出るという事があるのでしょうか。そうであるにもかかわらず、私たちは何か自分で判断し、自分の意志でお念仏しているように思い、その自分の背景にあるお育て、かけられた願いなど、自分が念仏を称えるまでの過程というものを見過ごしがちでございます。そのように思いの中で生きていく私たちを、自分が立っている大地に引き戻して下さるのがお念仏の教えを聞くということです。

このお念仏というものの本質、その根にある深い願いというものを明らかにして下さった七高僧のお一人に道綽禅師という方がおられます。唐の時代の方で『正信偈』にもその徳が讃えられ

てございます。その道綽禅師の遺された書物に『安樂集』という書物があります。その『安樂集』の中に、あまり聞き慣れない言葉かと思いますが「隱始顯終」という言葉が出てまいります。

隱始顯終

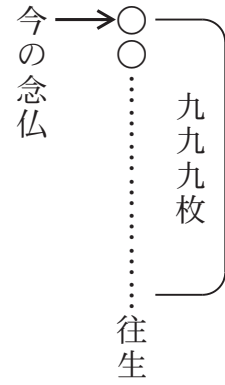
始めを隠して終りを顯すというそんな意味の言葉です。どういう文脈で出てくるのかと申しますと、道綽禅師がおられる頃は撰論学派（しようろんがくは）という、撰論宗（しようろんしゅう）ともいいますが、天親菩薩のお兄さんである無着の著わされた『撰大乘論（しようだいじょうろん）』という仏教の典籍を中心に研究する学派が隆盛を極めておりました。

撰論学派

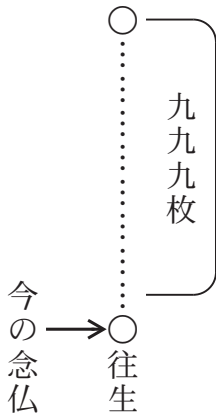
その撰論学派の人々が、当時盛んになってきた浄土教に帰依しお念仏をする人を批判されたというところがありました。どういう批判かというと、お釈迦様のお説法には聞く人に合わせて様々な説き方があるのだと。その中の一つに「別時意」という説き方があるのだと。

別時意

菩薩が修行して成仏するためには、三大阿僧祇劫という気の遠くなるような長い修行が必要なのですが、凡夫である私たちは怠惰で心想羸劣と言われるように意志も弱いので、そんなことを聞いてしまうと絶望して諦めてしまいうだろうから、そのような弱い機根のものをあげますための方便としてお説きになられたものが「別時意」だというわけです。したがって、お念仏を称えたらお浄土に生まれることができるとお説きになられているが、それはあくまでも方便の説だと批判するのです。ここで「別時」と言われるのは、お念仏をすることは、譬えていうなら、一金錢、つまり一枚の金貨の価値があるだろう、しかし、浄土に往生するためには千枚の金貨という、とても長い修行が必要なのであり、それが貯まってはじめて往生できるようなものであって、今の念仏だけで往生できるのではなく、あくまで往生は「別時」だと撰論学派の人達は主張したわけですね。そうするとそれを聞いた当時の念仏者は失望して、皆念仏をするのを止めてしまったといわれるほど大変な影響力をもつ説だったようです。そのような状況下にあつて、道綽禪師がそれに応答する形で説かれたのが「隱始顯終」という教えなのです。道綽禪師は、お釈迦様の説法でいわれる「別時」というのは撰論学派がというような意味ではないのだと仰います。



撰論学派の人が主張する「別時」とは、今の念仏を千枚の金貨の一枚目と捉え、さらに九九九枚必要だとし、その上で、今の念仏と往生は別時だとします。ところが道綽禅師は、そのことに真つ向から反論されるのです。この「別時」というのは、九九九枚分ともいえる過去の因と、その結果としてたまわった今の念仏とが時を別にするという意味なのだ。ただその過去の因（始め）は隠れていて、果である今の念仏（終り）だけが顕われているために、今あるこの念仏の本当の意味に気付いていないのだ。そのことを明らかにするために「隠始顕終」とお説き下さったのです。



したがって、今の念仏は結果としてたまわる往生のための最後の一枚ということであり、九九九枚の念仏とは、この自分が念仏に出遇うまでの、その背景にある願いや働きかけを意味するわけです。最初それを聞いたとき、何かとんち話を聞かされているようで、分かったような分からないような気持ちがありました。この道禪禪師の教えをどう理解してよいか悩んでいたころ、あるテレビ番組を見たときのことか思い起されました。

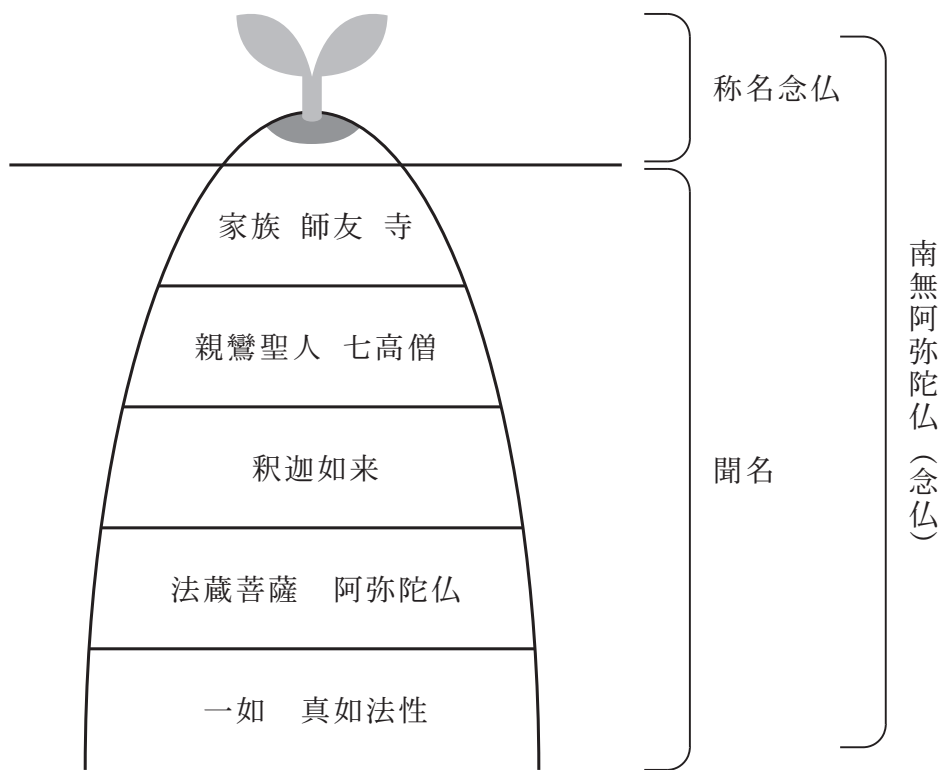
丁度父が無くなりまして一年位だったでしょうか。皆さんも記憶にあるかもしれませんが、『大地の子』というNHKのドラマが放送されたのです。二〇世紀に残りたいドラマの第一位にも選ばれました、山崎豊子さんの小説をドラマ化したものです。そのドラマの中で、それほどストーリーとは関係がないのですが、どうしても忘れられないシーンがありました。主人公は第二次世界大戦で残留孤児になってしまう陸一心という青年です。幼い妹と二人で中国に取り残され、すぐ離れ離れになり、孤独や貧困、そして差別など大変な境遇を苦勞して生き抜かれる一人の青年の生涯を描いたものです。陸一心が幼かったころ、心優しい中国人の教師が、養子として引き取って下さることになります。しかし、日本人だという事で差別や迫害を受け、随分苦勞されるのですけれども、ご両親が懸命に守り育てて下さり成人することができました。ところが、文化大革命が起こり、父が教師であること、さらには陸一心が日本人であることから、下放と言いまし内モンゴルの方に強制労働を強いられることに。もうそこに行ってしまうと死ぬまで帰れない

と言われるような大変な僻地に移動させられます。ところが、お父さんが一所懸命手を尽くし、彼を故郷に戻れるように奔走し、いろんな方に働きかけた甲斐あって、ついに陸一心が故郷に戻れるようになるのです。解放されると告げられた陸一心は、お父さんのおかげで帰れることになったことを報告するため、お父さんに感謝の手紙を送ります。その手紙を受け取ったお父さんは、非常に喜ばれ、その日から毎日毎日、内モンゴルから到着する汽車の到着する時間に合わせて迎えに行かれるのです。ところが、陸一心の帰郷が決定しても、現地での手続きがなかなか進まない。一週間たち二週間たち一月たち二か月たちその間お父さんは毎日毎日迎えに行かれるのですが、何日も空しい日々が過ぎるわけです。そして、ついに陸一心が解放されて帰って来る日が来ます。感動の場面です。電車が到着し陸一心とお父さんとの感動の対面です。二人は抱き合い、陸一心は「お父さん帰ってきましたよ」というのですが、その次に放った言葉が忘れられないのです。それは「お父さん今日僕が帰るとどうして分かったのですか」というものだったんです。私にとってこの一言はとても衝撃的でした。お父さんはこの数か月間、来る日も来る日も息子の帰りを念じ、迎えにきていたんです。しかし陸一心にしてみれば、たまたま自分が到着した日に、お父さんが迎えに来たという表面的な事実しか知りようがないのです。お父さんは何も話さず「いやいや何も気にするな」とだけ言って、二人が歩いていくというシーンがあったのです。陸一心は父の迎えとその再会を喜んでいますが、自分が思っている以上により深く父から願われていた

事実気づくことはなかったのです。自分はその時にふと思ったのです。これまでの人生で受けた色々な恩恵に対して、その表面だけを受け取り、その根にある深い願いや思いにどれだけ気づいてこれただろうかと。丁度たまたま父を亡くした後でしたから、父が家族のために働いてくれているその表面的な部分をみて感謝はしてりました。しかし、実はそうした姿の背景には私の思いの及ばないような深い願いが掛けられていたのだらうと気付いたとき、伝えることのできなかった感謝や謝罪の思いが込み上げてまいりました。道綽禪師が念仏について隠始顕終、始めを隠して終りが顕れているのだというのは、私たちには称えている念仏という結果だけしか見えていないという事実を仰っています。しかし、見えていないけれども、私たちが念仏に出会うまでには親や祖父母、さらには無数の念仏者の深い願い、お導きというものがあつたのだということ。そういう事実には私たちは気付いているようで気づけていないのではないのでしょうか。念仏との出遇いの背景にある深い願いに出遇ってはじめて、本当の意味でお念仏を頂くことになるのです。私たちはともすれば自分が教えを聞いて、自分が納得したからお念仏しているのだと念仏を私有化しているのではないのでしょうか。このことは、涙と視覚の話にも通じていて、私達には見えている世界だけでなく、本当はそれ以上に大切な見えていない世界というものがあつたことを示しているといえます。そのことへの気づきは、これまでの自分が見ようとする方向だけでなく、私たちに向けられている眼差しというものに対する気づきを意味します。要するに自分から見

という方向だけではなく自分に向けられている方向への意識が生まれるのです。この自分に向けられている願いに思いを致すことなく、ただ自分から見られる方向だけだと、自分にとって損か徳か、善か悪かという、自分の物差しであらゆるものを裁き、結局お互いが傷つけ合うことになり、孤独を深めることになるのでしよう。

私は最近、念仏を海に浮かぶ島に譬えてご説明させて頂いております。見えている島はとても小さいものであっても、海面の下の見えない部分には、その島の支える何倍も大きい山のような部分があるんですね。今見えている島の部分が私たちの称える称名念仏と言っていいかと思いません。ところが、私の口からお念仏が出てくるまでには、ご両親の姿や私を導いて下さった師や友、住職であったり、お寺の存在というものがあつたはずです。更にはお寺や師や友を生み出して下さった、三国七高僧や親鸞聖人がおられる。そしてさらに七高僧を生み出してくださいましたお釈迦様がおられるわけです。そしてお釈迦様をして、私たちに念仏の教えを説かされた法蔵菩薩の深い願い、阿弥陀様の慈悲の心がありましよう。そして一番奥底に「一如」や「真如法性」といわれる色や形、言葉をも超えた真実の世界があるのです。お念仏に出会うまでにはこのような私一人にかけられた仏様のおはたらき、無数の念仏者の深い願いがあるのです。この私にかけられた深い願いを聞き開くこと、それを「聞名」というのです。この「称名」と「聞名」の二つが一つになって初めて、親鸞聖人が六字の御名号と言われる南無阿弥陀仏（念仏）といえるのです。



私たちはこの「称名」の部分だけを南無阿弥陀仏のお念仏だと思いがちです。しかし、念仏する身となってくれという、この身にかけてられた深い願いを聞き開く「聞名」なくしては、お念仏とは言えないのです。かけられている願いを信知することの大切さを蓮如上人は、

信心獲得すというは、第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるといふは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり。

(蓮如上人『御文』八三四頁)

と教えてくださっています。私たちが真実信心をいただくということ、つまり念仏

申す身となるというのは、「南無阿弥陀仏のすがたをこころうる」ことであると。「南無阿弥陀仏のすがた」とは、図に示しました「称名」と「聞名」の全体を含めた南無阿弥陀仏のすがたをいうのでしよう。すると、親鸞聖人が「悲喜の涙を抑えて」というお言葉に続けて「師教の恩厚を仰ぎ」、「仏恩の深きことを念」じてと語られる言葉に改めて注目して頂きたいと思います。

師教の恩厚

仏恩の深き

師教の恩が「厚い」という事、そして仏の恩が「深い」という事は、この図の見えない海面の下にある部分が厚く、深いことを感覚的におっしゃっているのでしょう。お念仏に出遇うことのできたご恩の厚みや深さの感覚ですね。このように、この身を支えて下さる限りなき深い願いに触れることができたとき、この人生における出遇いも別れをも、悲喜の涙という感動をもつて受け止められるのでしよう。そして、この感動の深さが表白されているのが「恩徳讃」ですね。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし

この「如来大悲の恩徳」とは、仏恩の深きことであり、「師主知識の恩徳」とは、師教の恩厚

です。しかし、御恩を報謝するために、身を粉にして、骨をばらばらに砕けと言っているわけではありません。御恩の大きさ、深さに触れたものは、どれだけ恩返しをしようとしても、とても返すことなどできないという自覚、感動の表現なのです。よく考えてみますと、私が生きていくという事実は、あらゆるものが与えられ、あらゆるもののいのちを奪い続け、その私が許されつつけていたという事実に他なりません。そのような私が、どれだけ善根功徳を積み上げようとも、それをあがないうることなど出来ないはずです。この恩徳讃は、まさに与えられものの大きさ、深さに触れたものの感動を表すものであると同時に、恩を何らかの形で返し、清算しようと思っ
ている我々の等価交換の意識そのものを根底から問い直すものでもあります。

本日のご法縁を通して、私たちがこの場に身を運び、共々にお念仏を申させて頂くご恩に一人
一人がしっかりと向き合うことが出来ればと思います。そして亡き前住職様がその生涯をかけて
皆様のお心に法灯を灯さんとされた、その深い願いに触れることで、前住職様との出遇いと別れ
を、悲喜の涙をもって頂きなすことができると思います。それが、私たちの報恩の歩みであ
り、亡き御住職のご遺志に応える唯一の道であることを皆様と確認させて頂きまして、本日のご
法縁とさせて頂きまます。まとまりのない話ではありますがご清聴頂きましてありがとうございます
ました。

〈質疑応答〉

住職) 本明先生どうもありがとうございました。先代の住職にお会いしていないのに沢山お話を頂いて恐縮しながら聞いておりました。本明先生もお若い時にお父様のご逝去に遭われそういうご自身の別れを聞かせて頂き、ありがたく聞かせて頂きました。

私たちは父母と別れていくという、仏教を聞いていくと順番通り命終えていくという事はないと、司会の藤原さんは息子さんを亡くされたということもございますし、ここにはらっしゃいます方にはお子様を亡くされた方、連れ合いを亡くされた方、沢山の悲しみと向き合いながらここに参詣してください。そうした意味で本明先生の講題も「悲喜の涙を抑えて」という講題に心を一つ引き寄せられることがありました。『教行信証』から親鸞聖人の思いの深みを今日お話しくださったなあと頂いて非常にありがたく思いました。先代をご存知の御門徒さんは、声も大きくて非常にパワーもあって人に印象を与えるのが長けていたと言いますか、本人は非常に内気だとか言いますが、真つ先に自分が質問し職が内気だとは思わなかったという、笑い話になりますけれども、真つ先に自分が質問してとかというのを自分の売りにして、先代は率先して聞法をしていたと言えるのではないかと思います。それと同時に先生がこうしてお話してくださいました事を質問しながらそのこ

とをとおして自身を学ぶこと、問い返すことが大事であるという事、先生も質問されたことを喜ぶことがあると。話すとき切りが無くなってしまふのですがとにかく先代には表も裏も沢山見せて頂き教えてくれました。先ほど先生の図ですが心理学ですと意識の下に無意識があつて末那識、阿頼耶識とそういうことがありますけれど、なる程先生のこの図で一番深いところを一如と押さえて、南無阿弥陀仏と念仏の大きな島の深いところに見ていく、先程の見ていて見えていないというお話も目が啓かれました。今回、報恩講兼任職継承奉告ということで合わさせて頂きましたので先代の住職に合わせて何か話そうと思いましたが、先代がお寺を築いたという事は大変なパワーでした。それは聞法の道場としてそれこそ教えが仏恩の深さです。以前、櫟暁先生には教恩と願恩ということで仏恩の深きこと、これが報恩講が勤まつていくことであると教えられたこととございます。恩と言っても恩返しきれない、懺悔の中に大きなものを頂いているのだと。本当に命の深いところから支えられ育まれてここに存在しているといったところを先生の話を聞かせて頂き、改めて気づかせて頂きました。ありがとうございます。

岡田) 今日ありがとうございます。今日の講題はまさしく私にお話をしてくださったものと受け止めました。障り多き宿業の厚い私でございます。暗い海に波に打たれ岩がありました

て、そこに灯し火、行燈ですね。そこにちよこつといるような感じがいたします。それでこうやって聞法させて頂いて、その火が消えそうになったところにこの風が吹いて来まして、またちよろちよろと火がついたというかそのような私でございます。罪深くこうやって生かさせて頂くのがありがたくこの身が喜んでいきます。この悲喜の涙はその時に感動として出てきます。私も先ほど藤原さんがお子さんのことをおっしゃいましたけれど私も十七年前に長男を亡くしています。もう生きていく気もなれなく、さりとして生きることもなれなく大変苦しんでおりました。前任職は、とにかくお寺にいらっしゃい。当時は櫛先生でしたけれど先生のとにかく先生の話聞くのですよ。もうその一念でおっしゃって頂きましたので、最初はどんなものかしらと思っておりましたが聞かせて頂いて少しずつです、何か自分のこの身に落ちていくものが出てまいりまして、嬉しくてそれを涙で、また聞かせて頂きいつも聞法に行くと思うと、ころわくわくしていました。悲しみは消えません。でもそこにまた自分を知ってこの宿業の因縁に誰にも代わってもらえない自分、これがまた嬉しいです。これが自分に寄って下さる親鸞聖人の教えがこんなに深くありがたいものかと思わせて頂いております。今日の先生のお話を聞いて、また今から私が喜びに帰って生かさせて頂きたいと思っております。

小島) 今日では本明先生素敵な法話ありがとうございます。私は三年前に光照寺様にご縁をいた

いただきました。三年前というと、相模原のやまゆり園で連続の殺傷事件がありました。自身自身のことを言えば、人を恨んでしまつて長い間引きこもつてしまつて病気になるました。前任職にご縁を頂いて煩惱を信ずるのではなくて本願という世界があるという事を頂いて、きれいごとではなくて自分の力で超えなくていいという教えを頂いてありがたく思つております。先生がおっしゃられていた等価交換、その場で関係を断ち切ると変な縁を結ばなくてもすむと思いがちですけれども元々繋がっているものに対して自分が線引きをして分別をして自分を切り捨てている姿に気づかない。だから何というか私がおもし聞法を頂いていなければたら人を殺めていたのではないかとかとも思います。本当に三年前の事件の事を思うと聞法するご縁を頂いたのと頂かないのでは人生が変わるのだなあと思ひまして感想を述べさせてもらいました。

〈来賓挨拶 照誠寺住職 建部真文様〉

上尾市にあります照誠寺の住職でございます。私をご存知の方は何人かはおられると思いますが、光照寺様とご縁が深いことがあります。最初に挨拶をすることになりました。今日は二十九回目の報恩講、光照寺様の住職の表白にありましたように、平成二年の十月に愚庵が開かれて、それを開教の日とされていますことを考えますと、もう約三十年かなあと感慨一入のものがあります。私どもの寺院も開教寺院であります。ある意味では光照寺様と似ていると申しますか、私の父であります先代の住職も全く在家の者でした。法に触れるご縁は富山の生まれですのでご縁があったでしょうが、本当の意味で法を聞くという事を志したのは四十歳位だったと聞いております。こちらの光照寺の前住職さんの話を聞きますと、やはり四十歳前後頃だと思えます。私どものお寺が昭和五十一年に上尾の地に開教させてもらったのですが、資料を見ますと昭和五十四年には前住職の池田孝郎さんがうちのお寺に訪ねて来てくれます。今ですと違法ですが四十数年前ですから門徒さんと一緒に街の角々に「真宗のお寺が出来て法話をしています。」というビラを電信柱に張り付けて誰でもすぐに取れるようにしていたものを前住職さんがご覧になってうちののお寺に訪ねて来てくれました。チラシを見るという志がもう既にあったという事です。法を求める、何か心の中に落ち着かないものがあったのでしよう。昭和五十四年当時は良く知ら

なかったのでそういった話はしておりませんが、ある意味で私のお寺に私よりも早く縁を持って
いるのです。私は昭和五十五年に京都にあります真宗の住職を養成する専修学院に入る前まで一
般の企業で働いておりました。父親に親鸞の事を勉強してみたいと言いましたら、京都へ行けと
言われて行きましたら、もう既に前住職さんが照誠寺に来ておられました。その前年の報恩講の
時に一緒にお寺の駐車係をしていたことを覚えております。非常にパワフルな方だなあとその時
は思いました。それから本当に熱心に法を求めて来られましたのが前住職さんでした。そのこと
は今ここにおられる方はご存じだと思います。色々なところにアンテナを張っておられたと言
いますか、内外博覧の方でした。もう一つは真宗にとっても法にとっても大事なことですが、非
常に言葉を大事にされた方でした。その言葉から何を受け取るか、そういう事を常に思っておられ
た方でした。そして皆様ご存知のようにあの大きな声で説法獅子吼ですね。そういうお方でした。
そして急逝と言ってもいいでしょね、亡くなられてまだ半年少しですね。亡くなられる形で孝三
郎さん、新任職さんは光照寺を継がれたわけです。私は幸いに前住職が亡くなる前に継ぐことが
できました。本堂落慶法要と一緒に住職を交替しようという事でお前が住職をせよという事で交
替いたしました。交替しましても十数年間しょっちゅう怒られておりました。逆にそれは有
り難かったと思います。それを思いますと今度、新任職さんが全部一人でこのお寺を方向付け歩
ませるといふ事は大変なものがあると思います。まだ上に居るとうるさいですが、頼りにするの

です。何かの時には。だけれど今後はないわけです。自分一人で色々なことを判断しなくては行けない。そういう重責、今日の表白にもありましたようにその重たさをひしひしと感じておられることを思いました。住職というのは会社で言えばトップですから経営者ですから、色々な判断をしていかななくてはならない。その重責があるかと思えます。会社なら業績を上げて会社を発展させる。そのこと一点であると言いますか、簡単ではありませんが。しかし、お寺はそうではないのです。大きくは光照寺様を維持し発展させるという大きな仕事があります。もう一つもっと大事な仕事があるわけです。それは何かと言えば、お寺というのはこと浄土真宗においては親鸞聖人が顕かにされた本願念仏のみ教えをまず自分が信じ、それをまた人に伝えていくという、そういう大きな仕事があるのです。多分私の感覚ではお寺を運営するよりも正直厳しい。誰かが責めるわけでもありません。誰も何も言ってくれないのです。誰も何も言ってくれないところに逆に厳しさがあります。自分で求めないと、誰かが聞けと言ってくれるわけはありません。でもそこで励みになるのは皆さんなのです。今日も藤原様初め多くの方々が親鸞聖人のみ教えを頂こうと、そういう方が生まれ、その一心でここに集ってくださるのです。そのことが住職の一番の励みなのです。それがないと住職をやっている暇がない。そんな感じがいたします。そういう意味では気負う必要はありません。住職と一緒に歩もうというそういう念をまず持っていたらいいなあ。こういうことは住職からは言いにくいのです。ですから私が代わりに言わせて頂き

ます。共に歩む方がいることが住職の励みなのです。私は幸いに学院にいた時に、私はこの方に聞いていきたいなあという先生に会うことが出来ました。先生を求めることが真宗では非常に大事なものになると思うのです。前任職さんもそうでした。私のところを縁にして平成二年には既にここでもお会いになった方があると思いますが、細川巖先生にお会いして、その後、細川先生はお亡くなりになり、その後、櫟暁先生にお会いしてその先生を常任講師として教えを聞いてこられた。そのことを一貫して前任職さんは歩んで来られました。それが実は大事なことなのです。そして今日、昨年の先生の法話を本にした冊子、廣瀬先生の第二十八回の報恩講の講録を頂きました。それも凄いことです。その一端を担ったのが新任職さんだと思ふのです。ああいう形でつくることは凄いことなのです。そういう形で会えたという事は皆さん凄いことなのです。私もテープお越しをするのですが、テープお越しはなかなか大変なのです。させてもらおうと学ぶことが出来ますが、報恩講のお話を毎年出されるお寺はそうそうないです。凄いお寺に縁があったなあとそのことを改めて思うのです。それと同時に是非続けてもらえたなあと思うのです。色々なことを申し上げたいのですが、私もそうですがまず寺の経営の事を先に考えてしまふのです。違うのです。本当は逆なのです。まず教えの場を開く、教えの場を維持する。そのことの為にお寺の経営があるのです。ついつい本末転倒になるのです。やはりそのことを蓮如上人の言葉を集めた『蓮如上人御一代記聞書』の中に蓮如上人からすればお孫さんの言葉になるのです。

が「信心は一人一人の凌ぎである」と。誰かからもらうのではなくて、一人一人が教えを聞いてその教えを凌いで歩む事ですね。それが凌ぐという事の意味ではないかと思うのですね。そのことを思いますと二世の新住職さんとご一緒にお一人一人が信心を得る、凌ぐ歩みをしてもらうことが実はこの真宗に会ったこと、光照寺さんに縁があったことの大きな意味ではないかと思うのです。そのことを住職に代わって私が言わしていただく事が役目かなあと思ってお挨拶とさせて頂きます。改めて住職と共に歩むことを心に留めてもらえれば有り難いなあと思います。本日はどうもおめでとうございます。

〈住職挨拶 光照寺住職 池田孝三郎〉

建部住職様、心温まるお言葉ありがとうございました。

本日はお忙しい中、報恩講兼住職継承奉告法要に多くの皆様にご参詣頂き心より感謝申し上げます。

本年二月二十六日から三日間、京都の本山にて住職修習を受けて二月二十八日付で帯同総代の平山さんが見守る中、住職の任命を受けて参りました。先代の開基住職が本年三月三十一日還浄する一ヶ月前でありまして、入院中の病室で先代に住職修習を受けて宗務総長より任命を受けたことを報告しまして、本人は住職の責務の荷が下りたかのように、とても安堵しておりました。

本日は報恩講にて、阿弥陀様、親鸞聖人、ご門徒様と有縁の皆様にご交替りのご奉告をさせて頂くことで、いよいよ本願念仏のみ教えを頂いていく歩みをしなくてはという、身が引き締まる思いでおります。

今日の法要に先立ちまして門徒役員、護持会役員の皆様から玄関幕を寄贈頂き、朝九時三十分幕を一緒に張りまして記念写真を撮りました。役員の皆様には寄贈頂き感謝申し上げます。以前の幕は色あせておりましたので、新しい幕と共に、光照寺が親鸞聖人のみ教え、本願念仏のみ教えを聞き開く聞法道場として益々盛んになるよう、心機一転、新しい幕開けを歩んで行きたい

と思います。

浅学非才でございますが、皆様からお育てを頂きながら、「仏法弘まれかし、念仏よ興れ」という光照寺の旗印を大切に継承し、仏法弘通、念仏興隆、私にできることに尽力して参りますので、これからも末永く宜しくお願い申し上げます。

本明先生にはお忙しい中、遠方よりご出講ありがとうございます。このあと、ご法話を頂戴致しまして、私自身の歩みを確かめさせて頂き、報恩の心を聴聞させて頂きたいと思っております。宜しくお願い致します。

〈総代兼護持会会長 挨拶 平山正三〉

住職継承奉告法要を無事執り行うことが出来ましてありがとうございます。

照誠寺住職様にはこの法要にご参列頂き、又、お言葉を頂きありがとうございます。門徒を代表してお礼を申し上げます。

新任職には、表白と共に今の挨拶の中に非常に力強い抱負と言いますか、決意を述べられました。この決意を聞いて、これで光照寺も大丈夫だ、これからも大丈夫だという確信をいたしました。

前任職は、只今、照誠寺ご住職様からお話があったように非常に立派な方でした。真面目でバイタリティーがあつて、平成二年に光照寺を開基されて「真宗は聞法の宗教だ」とおっしゃって、四つの聞法会を開催されるとともにサークル活動もやってこられ、有言実行の方だつたと思います。新任職におかれましては、これらの前任職の意志を継いでやって頂きたいと思ひます。前任職が生前この後の取り組みとして本堂を南の聖地に建てたいとか、ビハーラを作りたいとおっしゃっていたのですが、実行できずにお浄土にお還りになってしまいました。

私が子供の頃に聞いた話ですが、人は如来から何らかの使命を帯びて生まれるのだと。そして、その使命を果たしたらお浄土に還るのだという事を聞いたことがあります。前任職におかれては

このお寺を開基し、仏法を弘め、霊園を造って、南の聖地を本堂建設予定地として確保されました。ここまでが前住職の使命だったのかなあと私は今そのように思っています。

新住職におかれては世の中が激しく変化しております、お寺の経営も厳しくなってくると思います、前住職の意志を継がれてやって頂きたい。そして新しいことにもチャレンジをして頂きたいと思っています。我々門徒も限らない支援をしていきたいと思っておりますので、皆さんどうぞこれからも光照寺新住職への支援をお願いをして挨拶とさせて頂きます。

最後になりますが、先に私から住職継承のご芳志をというお願いをしております。沢山の方からご賛同を頂きましたこと、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

あとがき

本書は二〇一九年十月二十七日、第二十九回報恩講における本明義樹先生（真宗大谷派聖教編纂室主任編纂研究員・京都教区専光寺住職）のご法話の記録です。

先生はご自坊のお寺を守りながら、本山の聖教編纂室主任編纂研究員という、聖教を現代に伝えていく為に、聖教の総点検、そして、改版出版していく骨の折れるお仕事に携わっておられます。私たちが聖教に触れさせて頂くということは先生のようなお仕事をされていらっしゃるご努力があつてこそ聖教を手にすることができるといふことに思いを馳せると、読むときの姿勢が正されます。

当報恩講は任職継承奉告法要と兼ねて勤修致しました。「悲喜の涙を抑えて」という講題で、先生ご自身の父親の逝去のときのお話を交えて、親鸞聖人のお言葉を引かれ、悲しみを超えて、私たちは仏から願われている存在であることの確かめを丁寧にお話し下さりました。本書先生のご法話より、「恩を知るといふ事を通して、はじめて私たちは今を生きるこの命を受け止め直すことができるのであり、力強い一步を踏み出せる」、「私たちのいのちの輝きを願い、呼びかけてくださいる「仏恩」の深さに頷く、つまり、本願に帰すことで、人生全体を悲喜の涙という感動をもって頂きなおすことができるのだと思うのです。あらためて自分の人生を自分の思いで、損か得か、善か悪かなどと価値付けし、そのことに縛られている事実には、一度立ち止まり、人生の

一つ一つをもう一度受け止め直すことを教えて下さるのが『教行信証』という書物である」とご
教示頂きました。本願のみ教え、親鸞聖人の教えを聞くことができるということは、自分の思い
を遥かに超えて、今、私に届けられていることは、大きな背景があり、ご恩があります。そのこ
とを報恩講と兼ねて住職継承奉告法要を通して自分の立脚地を再確認させて頂きました。しかし、
ご恩に思いを致すと、恩を忘れて、自我関心の自分自身であり、忘恩の私であることが、胸を突
きさしてきます。そのことを抱きながら、またそのような私だからこそ如来のお心に触れること
が待たれていると思えます。これからも聞法生活を歩んで参りたいと存じます。

先生にはお忙しい中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申
し上げます。

又、来賓の照誠寺建部住職様、平山（総代兼護持会会長）様には、ご挨拶の原稿を校正頂きま
して誠にありがとうございます。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様に感謝申し上げます。合掌

二〇二〇年十月十一日

第三十回報恩講 光照寺創立三十周年にあたり

光照寺 住職 池田孝三郎

第二十九回 光照寺報恩講 法話
「悲喜の涙を抑えて」

本明 義樹先生 講述

2020年（令和2年）10月11日

発行 真宗大谷派 弘興山 光照寺

事務局 〒331-0821

埼玉県さいたま市北区別所町102-2

電話 048-651-2781